

アレクシス・デヴォー

言いわけしないで

——ビリー・ホリデイの歌——



訳者略歴

風呂本惇子（ふろもと あつこ）

東京女子大学英米文学科卒業。東京都立大学大学院修士課程修了。
現在：徳島文理大学文学部教授。

著書『アメリカ黒人文学とフォークロア』（山口書店、1986年）

訳書（共訳）：『現代アイルランド短篇小説集』（公論社、1978年）

『アフリカ昔話叢書——ニヤングの昔話』（同朋舎、1987年）

ロッド・サーリング著『真夜中の太陽』（山口書店、1983年）

『アリス・ウォー 短篇集——愛と苦悩のとき』（山口書店、1985年）

山田 裕康（やまだ ひろやす）

1948年生まれ。立教大学文学部英米文学科卒業。関西学院大学院
文学研究科博士課程中退。現在：大阪経済大学助教授。

著書：『ジェイムズ・ボールドウィンの「山にのぼりて告げよ」』

（共著『アメリカ小説』創元社）

論文：「黒人女性詩人たちの世界」（『大阪経大論集』第121・122号
大阪経大学会）

「ニッキ・ジョヴァンニ『再生』論」（『大阪経大論集』第164号
大阪経大学会）ほか。

いいわけしないで

——ビリー・ホリデイの歌——

1986年12月15日 初版第1刷発行

著 者 アレクシス・デヴォー

訳 者 風呂本惇子／山田裕康

発行者 前島 俣

発行所 国 文 社

東京都豊島区南池袋1-17-3（〒171）

電話03(987)2865 振替東京8-195058

印刷 文昇堂／製本 並木製本

定価 1300円

アレクシス・デヴォー

言いわけしないで

——ビリー・ホリデイの歌——



FRANK DRIGGS COLLECTION

DON'T EXPLAIN: A SONG OF BILLIE HOLIDAY by
ALEXIS DE VEAUX

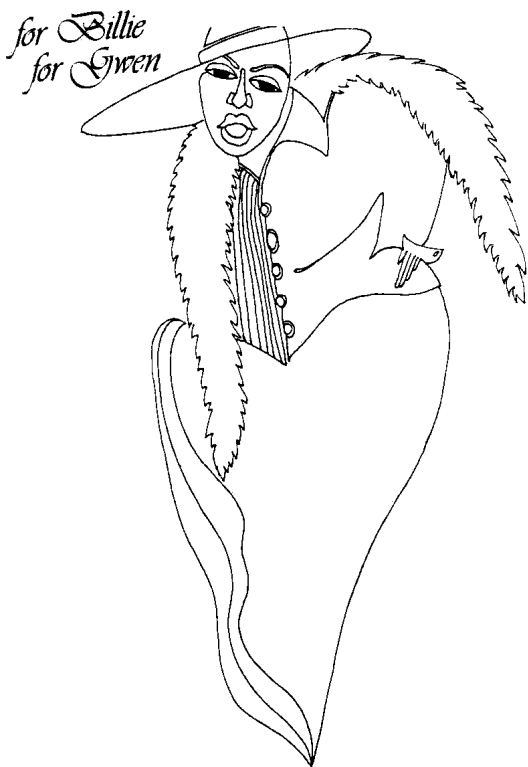
Copyright © 1980 by Alexis De Veaux
Japanese translation rights arranged with Harper & Row
Publishers, Inc. through Japan UNI Agency, Inc., Tokyo

謝 辞

わたしたちの芸術は 幾度も幾度も
記録されぬまま消えて行ったので
あとに残されたものについての
調査研究をしたり記録を見つけたりが
できなくなることがよくあるが
ありがたいことにビリーは彼女の音楽を残してくれた

わたしはビリーについて書いたあらゆる作家や批評家に深く感謝している。特に、すばらしい調査研究とレディ・デイのイメージに文学的貢献をしたヘティ・ジョーンズ、ジョン・チルトン、ラルフ・J・グリーンソンに；特別な感謝を述べたい人々の中には黒人文化研究ショーンバーグ・センター（ニューヨーク市ハーレム）のスタッフも含まれる；テープの件ではライオネルに；わたしの家族にも；祈ってくれた祖母のルビー・ヒルに；何年も前にわたしが言ったことを覚えていたくれたリズ・ゴードンに；わたしが最後の二、三ページを読むのに耳を傾けてくれたオードリ・バーンズに；わたしに自分たちの思い出や意見を語ってくれて、わたしが公平な扱いをしているかどうかを確かめるよう言ってくれたすべての人；時折のつらいひとときをわたしがきりぬけるのに協力してくれたバレリー・メイナード；わたしが電話のプラグを抜かねばならなかった理由をわかってくれた全て

の友人たち；最後の二晩，三晩，タイプを打つわたしの
そばで寝ずに起きていてくれて終末はまったく事実には
ずれるからもう一度やり直せと言ってくれたビリー自身
の魂（わたし，やり直した）；そして誰にもましてグエ
ンドリン・ハードウィック，彼女はわたしがきちがいじ
みてくると料理をいっさい引き受けて，あの忠実な愛と
はげましを見せてくれた人。



目 次

謝 辞	3
スイング	7
ジャズ	37
ブルース	109
ラスト・ソング	127
黒い女の歌／黒い詩人 そしてビリー・ホリデイ	山田 裕康 155
アレクシス・デヴォーについて	風呂本惇子 165

スイング



FRANK DRIGGS COLLECTION

これは長い歌
歌おう
ビリー・ホリデイを
言葉が音符になる
高く低く
激しく熱く
やさしくてクール
これはジャズ
歌おう

ビリー・ホリデイが本名じゃなかった

1915年4月7日にボルティモアはメリーランド州で生まれた時
名前はエリノラ

母のサディ・フェイガンは13歳の女中で

父のクラレンス・ホリデイと

正式に結婚していなかった

彼は15歳、新聞を売り

放課後トランペットのレッスンを受けていた

クラレンスはトランペットに夢中

サディはクラレンス少年に夢中だったが

クラレンスの家は黒人上流社会

スキャンダルを恐れ

彼が父親になることを許せなかった

1915年のボルティモアならではのお話

というわけでエリノラは母の姓を受けた

サディはまた女中になり

エリノラはおまえの子じゃないと言う母の言葉に

クラレンスは頭を抱えた

どうすればいいんだろう

金がなく赤ん坊を抱えたサディ・フェイガン

何とかやっ払いこうと人の倍

働いた

床をこすり

洗濯

料理

仕事がぐずいね

とどなられても／黙ってハミング
泣かないでベイビー 泣かないで
おやすみベイビー 泣かないで
なんとかなるよ かわいい子
おやすみベイビー
泣かないで
自分もクラレンスと一緒に暮らしたいのに
と思いながら

そしてついに実現した
エリノラが三つになった時
サディとクラレンスは結婚し
ボルティモアのダラム・ストリートの古い家に移った
なるほど二人は若くて金はないが
彼はトランペットを愛しそのうえ
サディと赤ん坊に夢中だった
他のことは目じゃない

するとクラレンスに軍隊からの召集令状
海の向こうのパリへ送られた
いつもトランペットだけは吹いていたと思っていたが
ヨーロッパで毒ガスにさらされ
肺をやられ
それでギターに持ちかえた
どうしてもミュージシャンになる
情熱に燃える彼には
ミュージシャンになることこそすべて

ミュージック

ミュージック やつともものになった

ミュージックが家庭を崩壊

ミュージックそして第一次大戦が

エリノラはサディのもとで成長し

ローラースケートに野球

裏庭の木のぼりの毎日

それに貧しい黒人のいとこたちと蓄音機のささやくジャズが相手

白い絹のソックスや

エナメル靴

ボルティモアの黒人専用の5 & 10セント・ストアの

ホット・ドッグが欲しかった

そして黒人学校入学

エリノラという名はきらい

父は彼女をビルと呼んだ

おまえはおてんばだからと言うわけ

彼女もそれが気に入った でももっと

すてきなほうがいい

大好きな映画スターのビリー・ダブのような

ビリー・ダブはエリノラのあこがれ

10セントを節約するため

映画館の裏からこっそり

入った

エリノラはビリー・ダブのような髪型にし

爪を塗り

名前を変えた

エリノラからビリーへ

大戦が終わりボルティモアに戻ったクラレンス・ホリデイは
ジャズしか興味がない

彼はマッキーニーズ・コットン・ピッカーズ楽団に入団
演奏旅行に出て

ビリーとサディと共に暮らすことは二度となかった

大戦が終わってもサディは工場で
軍の作業服や制服を作り続けた

8歳のビリーは15セントで

白い大理石の階段とトイレを磨いたり
使い走りで5セントか10セント稼いだ

そのうち五年生になり

学校をやめた

大柄で豊満な体の

大人子供

当時の南部の男たちは

一人前の女と思いこんだ：

ある日のことだった

ビリーが学校から戻ったら

近所の男が

家にいた

ディックさんという人 そうディックさん

ビリーの近所の人

ママはどこに
美容院へ行ったよとディックさん
ママはあんたを待って
ある所へ連れて行くように言ったんだ
さあ行こうビリー
ディックさんと一緒に通りへ出た
そうディックさん ディックさんとビリーは
ある女の家へと連れだった
そこにつくと女が二人を招き入れ
ママは遅くなると電話してきたよと言った
ほんとに遅くなりビリーは眠りこんだ
ディックさんがビリーを奥の部屋へ連れて行き
寝かせた
そうディックさんは
ビリーのベッドにもぐりこんだ
その人の名はディックさん
彼には嫉妬深い女がいた
彼女はビリーの家に行き
ママに告げた
ビリーをあたしの男から離して
バカを言うのはおよし
ビリーはまだ子供だよ
とサディ
嫉妬深い女は怒鳴った
一緒に寝てるんだよたった今
そこでママは

ディックさんの女に
自分と警官を
その家に案内させた
その家でビリーは遅くなるというママを待ち
横になり眠ってしまったんだ
警官とサディ
そして嫉妬深い女が
例の女の家に着いた時
ビリーは血まみれで泣きわめいていた
警官はビリーと
ディックさんとサディを
署まで連行した
ディックさんは40代ビリーは10歳
でも警部補はビリーが
たった10歳とは
信じなかった
警察のみんなもそう
ビリーの
豊かな胸と大きな体を見ると
たった10歳だとは
みんなには思えない
あの体で
ビリーがディックさんを誘惑したんだ
みんなはそう思った
彼女は留置場に入れられ2日たって
裁判になった

ディックさんは
五年の刑を言い渡され
ビリーは21歳になるまで
カソリックの感化院にいるよう
言い渡されたが
祖父とサディがやとった
弁護士と
サディの勤め先の
金持ちの白人も手助けしてくれ
ビリーは出所できた
ビリーは12歳
1927年のことだった

ビリーが家に戻ると
気持ちよく暮らせるように精一杯がんばって
サディはしゃれた物をそろえてくれた
けどいつもお金に困り
もっといい暮らしをとサディは
女中になるために北部へ向かった
ビリーは親類にたらい回し
そのあいだ彼女の慰めは
ひとりで
音楽を聴くことだけ
そして歌手の真似をした
昼も夜もひまさえあれば
彼女は歌い続けた

ベシー・スミスや
ルイ・アームストロングのブルースを
初めて聴いたのは
掃除などして働いていた
売春宿のパーラーの古い蓄音機
ビリーは魅せられた
「ウエスト・エンド・ブルース」の
粹なルイのスキヤットが
初めての出会い
ベシーの歌い方を真似て自分もどろーんと歌ってみた

ベシーの音楽だけじゃない
ベシー・スミスを実物以上にする
あの生き方にひかれたのだ
新聞や巷のうわさではベシーは
すばらしい音楽生活を
送っていた
ビリーはそのスタイルとフィーリングをつかみたかった
ベシーの口から
ベシーののどから
腹の底からしぼり出される
あの声
ものういフィーリングを
自分のものにしたくなった

13歳になってビリーはいとこのアイダと暮らした
母は女中としてニューヨークで働いていた